

インタビュー

「すぐさま避難する！この意識の大切さ」

震災時は、公用車を運転中でした。突然、携帯電話の緊急地震速報が流れ、直後に大きな揺れがありました。津波がくると直感し、すぐに職場の田老庁舎へ向かいました。過去、何度も津波被害を受けた田老の庁舎は高台にあり、私は難を逃れました。家族も避難して無事でしたが、自宅は1階が津波で浸水し、大規模半壊の被害を受けました。

震災では、すぐさま避難！という意識の大切さを改めて認識しました。私たちの地区で地震が起これると、津波を経験している人は、すぐさま山へ逃げます。一方で津波を経験していない人の中には、まさか、自分の身には危険はおよばないだろうと行動が遅れてしまう人もいます。この避難に対する意識の差が、大きな命の分かれ道となります。私たちの経験を知ってもらうことで、1人でも多くの方が、「その時」に適切な行動をしていただけるよう願っています。

宮古市田老地区

明治、昭和と大津波に襲われたため、津波対策には力を入れている地区。対策の1つに高さ10mの巨大な防潮堤があるが、東日本大震災ではそれを超える高さの大津波により大きな被害を受けた。（写真は、今年7月に防潮堤の上で津波について説明を受ける苫小牧市こども研修団）



やまぎき まさゆき
山崎 正幸 さん

宮古市危機管理課主査。防災業務に携わり通算約10年のベテラン。現在もまちの防災講座や復興業務に携わっている。3人の娘をもつ優しいお父さん。

東日本大震災で大きな被害を受けた宮古市の方はなにを思い、なにが必要だと感じたのでしょうか。

大震災が起こった その時

「枕元のリュックサック」

宮古市^{くわがさき}鉾ヶ崎 男性

自宅は海岸に近く、年1回の避難訓練にも参加していた。ドンと大きな揺れがきたので、とっさに防災リュックを持ち山へ逃げた。そのリュックは最低限の防災用品を入れ、いつも枕元に置いていたものだ。通帳や保険証などは全部入れていたので、被災してから、必要になった時には大変助かった。

『あなたにつなぐメッセージ』
3・11 大津波体験語り継ぎエピソード集より（宮古市）

「情報がない…娘と孫は無事か！」

宮古市^{かなん}河南 女性

高台にある自宅に一人でいた時に地震が発生。揺れは大きかったが、停電になり状況はわからず、夕方になっても小学6年生の孫が帰ってこない。電話も通じず、娘とも連絡がとれない。情報が入ってこないで何が起きたかわからず、夜中に娘たちが帰ってくるまで不安な時を過ごした。

『あなたにつなぐメッセージ』
3・11 大津波体験語り継ぎエピソード集より（宮古市）

宮古市の体験より

実際の震災時の話から、私たちが災害に備えるうえで、必要なことが見えてきます。

■「まさか〇〇はないだろう」は危険

東日本大震災では、地震直後に「すぐ避難をする」という意識を強く持ち行動に移した人と、そうではない人とで生死を分けた例が多くありました。「まさか揺れはこれ以上大きくはならないだろう」「まさかここまで津波はこないだろう」と過去の経験をもとに行動を決めてはいけません。身を守るために、すぐに避難するなどの対策をとりましょう。

■日頃の備えが大きな助けに

防災用品の重要性は知っているが、なにを準備してよいかわからないという方は、次のページを参考にしながら必要を確認しましょう。また、一度準備した方も、非常食の消費期限や機器の動作などを定期的に確認しましょう。

■災害に対して「家族の話」が重要

災害時には携帯電話が繋がらず、家族の安否状況の確認ができないケースが多くあります。そういう場合のために、日頃から連絡方法や避難場所について、家族で話し合いましょう。

日頃の防災への心がまえの差が生死を分けることがあります。災害は明日起こるかもしれません。今からできる備えを始めましょう。